

## Initial Readingに関する一考察

広大大学院

那 須 恒 夫

### I はじめに

Audio-Lingual Habit Theory (以下, A-LH 理論と略す) と呼ばれる理論では, その基礎原理として, 言語の第一義が音声であるとする, Speech Primacy の立場がとられ, 外国語学習の入門期のある一定期間, 文字を排除した口と耳による音声主体の指導がなされる。こうした音声主体の教授法に対して, Wilkins は, 最近の言語教育の実状が多くの言語学者兼言語教師からの影響を受けていることを指摘し, さらに, 言語学者が音声を第一義と見なす事実が, 外国語教育の分野で如何なる決定的な意味をもつのかを問うてみることの必要性を説いている(①: 8)。そこで, 本論の目的は, A-L approach で唱導されている initial reading period (以下, I-R-P と略す) について, 外国語学習の初期のこの段階において, 学習者にどのような言語学的, 心理学的な要因が含まれているかを考察することにある。

### II I-R-P の位置づけと論拠

まず I-R-P の位置づけに関して, Cornfield は, 口と耳による口頭練習を通して, 目標言語の音韻体系が完全に習得される期間と見なし(②: 32)。一方, Grittner は, 目標言語の全ての音韻体系が, 読み, 書きに移る前に習得される必要はないと述べ(③: 249), 学習により I-R-P の位置づけが異なっている。また, I-R-P の長さについても, 定説はなく, 2週間から長いものは2年と学習者の年齢やその他の学習条件により, 左右される。本論では, I-R-P を比較的短期間として, 聞き, 話す, そのものの能力をのばすことを目的とするというより, むしろ, 外国語の基本的な音組織, イントネーション, リズムなどを習得することにより, 望ましい外国語学習の態度を身につけさせることにその主目的があると見なし論をすすめていく。

I-R-P を唱導する論拠は, すでに述べたように, Speech Primacy の立場であり, Woodsworth は, その理由づけとして, 次の5点をあげている。

- ① 音声言語は, 人類の歴史上, 文字言語以前に出現していたこと。
- ② 母国語習得の立場から, 音声言語は, 個人の成長過程で読み, 書きの学習に入る前に学ばれること。
- ③ sub-vocalization がなされること。
- ④ 文字が音声の不完全な写しにすぎないこと。
- ⑤ 世界の全ての言語は話し言葉を持っているが, 相対的に, 固有の書記体系を持つ言語は少ないこと。(④: 75-78)

さらに, pedagogical な観点から, 読み, 書き前に口頭練習を行なう論拠として,

⑥ 早期の文字導入が, 目標言語の正確な発音習得の障害となる。つまり, 母国語から干渉を引き起こす原因となること (⑤: 173-182)

⑦ 学習者にとって, 音声は文字より強い動機づけとなること (⑥: 22)

⑧ 文字の征服, 習得はやさしくはなく, 中学一年生が文字の導入と同時に学力差を示すこと (⑦: 29)

⑨ 直読直解の習慣が身につくこと (②: 35)

などが挙げられる。しかし, 外国語学習の入門期に音声を主体とする教授法が, 学習者の側からみて, 妥当な方法であるかどうかについては, 再検討してみる必要があるように思われる。そこで以下, 4つの観点から I-R-P の問題を考察していくことにする。

### III I-R-P の問題点

#### i) 集中的な口頭練習の欠陥

問題点の第一は, A-L approach では, Listening Comprehension よりも Speaking の方に重点を置く点にある (⑧: 18-20)。Postovsky は, 20才前後の若者を被験者として, ロシア語学習の入門期の指導法についての実験を行ない, 外国語学習の初期段階における集中的な口頭練習は, 少なくとも3点, つまり, Listening への生徒の注意力を散漫にすること, 短期記憶に負担となることから学習を損なうこと, そしてその結果, 生徒は誤った発音におち入りやすくなるとし, 初期の段階では発話の production より, 文字の導入により好ましい結果が得られたと述べている (⑨: 229-239)。Asher は, 被験者として大人と子供を使った, ロシア語学習における total physical Response と呼ばれる実験から, 入門期において, listening と speaking を同時に行なうことは, Listening Comprehension の力を損なう結果を招く危険性のあることを報告している (⑩: 3-17)。上記の実験報告から, Speaking 中心の I-R-P の指導において, その目標言語の正確な音体系の習得が十分に達成されるかどうか疑問が出てくる。

#### ii) 聴覚理解の困難さ

第2の問題点として, 聴覚に関わる問題を考えてみる。Rivers は, 外国語学習初期の段階における学習者の聴覚理解の低さを指摘し, それは, 学習者を緊張と不安に落とし入れ, 学習効果を減ずる原因となると述べている (⑪: 99-114)。また, Trace は, A-L approach への反対理由として, 普通の学習者の聴覚記憶の低さを指摘し (⑫: 382-385), Dodson も同様の立場から, 普通の生徒にとって, 5音節以上から成る耳慣れぬ音連続を処理することは極めてむずかしいであろうと述べている (⑬: 59-63)。さらに, Pimsleur et al. は, 彼らの実験結果に基づいて, 1クラスは平均して10~20%の割合で聴覚記憶に劣っている生徒がいることや, 聴覚記憶の低さが外国語学習における under-achiever をうみ出す原因となっていることを報告している (⑭: 114-139)。以上の点から, 入門期の口と耳による学習に生徒が十分耐えているかどうかという危惧の念が生じてくる。

#### iii) 動機づけの損失

第3番目の問題点は、動機づけと集中的な口頭練習との関係である。A-L approach が外国語学習者にとって有力な動機づけとなっていることは、1964年のコロラド大学における、Scherer と Wertheimer の比較実験で報告されている (⑨: 243) しかし、余りにも口頭練習中心になると、学習者にとっては、逆効果となることが、大学生を被験者として、dropout の状況を調査する実験で報告されている (⑩: 91-94)。それゆえに、動機づけとして音声の果す役割は、口頭練習の度合によっては、その効果を失うことが考えられる。

#### vi) 知的理解の欠如

第4番目の問題点は、言語学習を習慣形成とみる A-LH 理論では、認知的な面での活動が軽視される傾向にあることである。この問題は、外国語の学習過程が本国語の習得過程に順ずべきか、それとも、「人為的な」過程としてみなすべきかという点にも関連して、よく問題となるが、外国語学習では、幼児の母国語習得過程に比べ、学習言語への強制力が弱いとか、それに接する時間数が絶対的に限られている点などで不利な立場にあると言える反面、成人の場合、物事を論理的に考える認識力が発達していることの有利さが指摘される。そこで、Brown は、外国語学習において、単なる一時記憶よりも、retention と長期記憶が重要な役割をになっているとし、学習の際の重要な認識過程である包摂 (subsumption) 一つまり、学習が機械的ではなく、有意味的になされることを意味し、それは新しく学習された事ながら、学習者によりその時までには作りあげられている概念の体系に非任意的に結びつけられること一により、長期の保持がなされると述べ、認知学習の重要性を説いている (⑪: 222-227)。

## IV 結 語

以上、4つの観点から I-R-P の問題点を考察したのであるが、文字を排除し、口と耳による A-L approach の指導が、I-R-P における学習要因を十分に考慮したものであるかにつけてはさらに検討の余地があるように思われる。

#### (参考文献)

- (1) Wilkins, D.A. (1972), *Linguistics in Language Teaching*, (Edward Arnold Ltd.).
- (2) Cornfield, R.R. (1966), *Foreign Language Instruction: Dimensions and Horizons*, (Appleton-Century-Crofts Division of Meredith Publishing Co.).
- (3) Grittner, F. M. (1969), *Teaching Foreign Languages*, (Harper & Row).
- (4) Woodsworth, J.A. (1973), 'On the Role of Meaning in Second-Language Teaching,' *LL* 23,1.
- (5) Estarellas, J. and Timothy, R.F. Jr., (1966), 'Effects of Teaching Sounds as Letters Simultaneously at the very Beginning of a Basic Foreign Language Course,' *LL*, 16, 3&4.
- (6) Wilkins, D.A. (1974), *Second-Language Learning and Teaching*, (Edward Arnold Ltd.).
- (7) 石井正之助 (編) (1969), 『聞き、話す領域の指導』, (研究社)
- (8) Newmark, G. and Diller, E. (1964), 'Emphasizing the Audio in the Audio-Lingual Approach,' *MLJ*, 48, 1.